

全さんま棒受網地域漁業復興プロジェクト（富山地区部会・大型）

事業実施者：富山県鮭鱒漁業協同組合

使用船舶名：第八珠の浦丸（199トン）

支援期間：平成28年8月20日～令和元年8月19日

（さんま棒受網漁業）

（取組の内容）

- 省エネ・省コスト化：
同一船型船の建造による建造コストの削減並びに省エネ船型、大口径固定ピッチプロペラ、低燃費型機関及びLED漁灯の採用等による燃油使用量の削減を図る。
- 漁船の安全性・労働環境の向上：
二重バラストタンクの設置等による船体復元性の改善、省力機器の導入等により、労働環境及び乗組員の労働意欲の向上を図る。
- 公海さんま操業への展開：
国際的な資源管理の下、本漁期（8～12月）前の5～7月に公海さんま操業（ロシア加工母船への洋上売魚及び単独操業）を実施し、国内供給量を増加させ、公海での漁獲実績の積み上げを図る。
- 漁獲物の付加価値向上・高度衛生化：
船上箱詰とブロック凍結品の生産及び高度衛生管理により、流通段階における付加価値向上及び衛生管理を図る。



第八珠の浦丸



ブロック凍結品生産



洋上売魚風景（ロシア加工母船フェセポロド・シビルツェフ32,096トン）

下写真提供：国立研究開発法人水産研究・教育機構

（事業の成果）

- 同一船型船の建造、被代船からの漁労機器等の一部移設により建造コストが大幅に削減（4千万円以上）された。
- 漁場の遠方化、探索時間の長時間化等により、燃油使用量は、1年目568kl（従来比7%削減）、2年目628kl（3%増）、3年目（公海さんま操業を含む）1,019kl（2%増）となった。
- 主機関の低重化を実施したことにより、大幅な低重心となり復元性が改善され、安全性が向上した。
- 省力機械の増設（サイドローラー・ミニボールローラー）により、操業時の網揚作業の軽労化が進捗した。
- 本漁期の水揚量（3年平均）は1,450トンで計画（2,560トン）の57%であったが、魚価上昇により水揚金額（3年平均）は、307百万円と計画（328百万円）の94%となった。
3年目に計画変更して新たに実施した公海操業は、漁場が極端に遠方に形成され、魚影も薄かったため、水揚量は325トン（計画661トンの49%）、水揚金額は、19百万円（計画61百万円の31%）であった。
- 船上箱詰（3年平均）は、魚体サイズが小さくニーズと合致しなかったため実績267箱で（計画1,050箱）の25.4%となった。また、ブロック凍結品（3年平均）は、魚価が安く採算が合わなかったため生産を控えた結果、実績91箱で計画（2,520箱）の3.6%となった。
3年目の公海操業では、計画にはなかったが、漁場からの距離が遠かったため、船上箱詰239箱、ブロック凍結378箱を実施した。
- 海水殺菌装置を導入したことにより、さんまの鮮度保持が向上するとともに、新しい市場の整備により高度な衛生管理が確立され、安心安全で高品質な漁獲物の供給ができた。